



センター紀要創刊号の発刊にあたり

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山形, 積治 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://hokkyodai.repo.nii.ac.jp/records/10409 |

巻頭言

センター紀要創刊号の発刊にあたり

北海道教育大学生涯学習教育研究センター長 山形積治

「人が学び続ける社会環境を創出しよう」と言われだして、随分長い時間が経過しているがわが国の状況を見たとき、満足な状態ではない。このような生涯学習社会をいかにして作り上げ、ここに市民が参加し、自己実現を成し遂げる道をいかに拓くかと言う命題を持って開設されたのが本センターであると認識している。

今回発行の紀要は平成12年4月に「北海道教育大学生涯学習教育研究センター」として正式な認可を受けてから第1号の発刊ではあるが、旭川校が平成9年度から分校の生涯学習教育研究センター紀要として、これまでに3冊の紀要を発行したことが土台にあることは言うまでもない。

当初、創刊号紀要としての体裁が整うだけの論文が集まるかどうかの危惧がありましたが、札幌、函館、旭川、釧路、岩見沢各分室での積極的な取り組みが功を奏して、各分室当たり2編以上の投稿が寄せられて十分内容の濃い紀要となった。しかし、生涯学習と言う概念はさまざまに受け止められる傾向があり、目的が明確な学会が発行するような統一基準では編集されてはいない。生涯学習・教育に対する諸説があるように、生涯学習とはこの紀要が示すように多面的な切り口が有って然るべきと考えている。即ち、生涯学習・教育は学校が組織的に続けてきた「定型形の学習形態」を乗り越えて「非定型形の学習形態」を模索するところに原点があるからである。平成14年度から学校教育にも新しい考え方が取り入れられ、「総合的な学習の時間」が発足し、まさに生涯学習社会に対応した学校教育が始まろうとしている。さらに、学校は学社融合と言う考え方で、地域の生涯学習の拠点になるべく模索をはじめたところも多い。これらのことをリードすることも本誌の願うところである。

世界はまさに情報化の時代に突入し、音声媒体、映像媒体、紙媒体、電子媒体による情報が洪水のごとく市民に押し寄せてくる時代となった。また、若者の活字離れが取りざたされる中で、本誌が発信する情報がいかに市民に受け止められるかは大きな関心事である。情報の価値論から言うと、発信した情報は生活主体に確実に受け止められて、生活主体の行動を変容しなければその価値がない。その意味から、本誌が発信する情報によって、北海道内の生涯学習・教育の発展や市民の継続学習に対する行動の変容をもたらさなくては、その意味がない。

さらに進んで、本誌をセンターと道民との情報交流の場にしたいとも考えている、本誌を手にした感想やご意見を北海道教育大学生涯学習教育研究センターまでお寄せください。皆様とともに本誌を充実した専門誌に育てて行きたいと願っております。